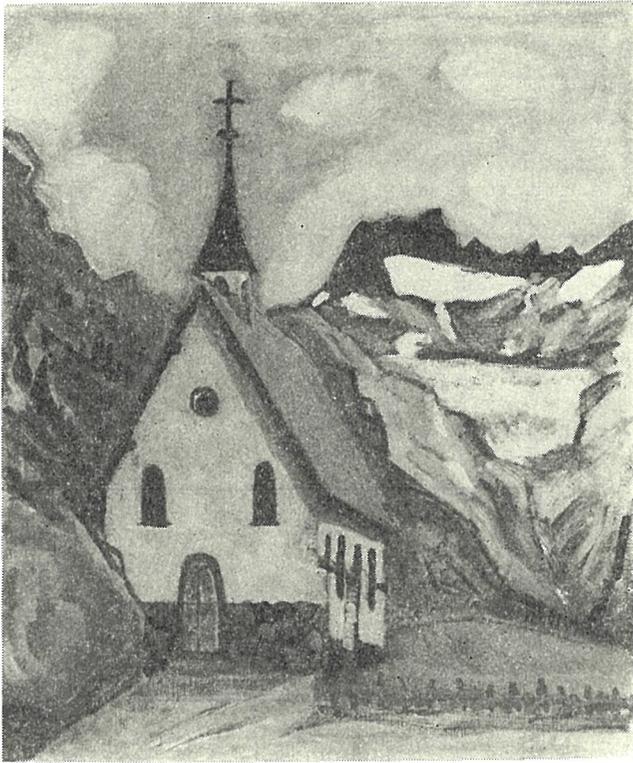


グリムゼル峠の教会



(油彩20号F)

えと文

明井克子

絵は学生時代のクラマ画会の頃まで描いていたが、コンピュータの仕事についている間はやめていた、忙しさのためもあるが絵とプログラミングは対象の客観的な認識とその後創造の部分があり、根底に同種のものであって充たされていたのだと思う。その仕事を離れ、十数年ぶりに余暇を持ち、山のグルーブに加わって、山と高山植物のスケッチから再び絵に親しむ機会を得た。

山旅は地形の変った処ほど楽しく、絵心も刺戟される。昨夏の氷河との出会いは素晴しくユングフラウのアレッツェル、マッターホルンのゴーンアール、モンブランのgl.等、氷河期の名残がアルプスに現在もかくもあって、間近に体験出来ることに心が踊った。

この絵はグリムゼル峠を越えてツェルマットに向う道とフルカ峠の道が出合うグレッツの教会で峠は二一六五mにあり十月には不通になる。氷雪と風化し赤茶けた岩山の、乾いた自然の支配する処に、すっと聳える古い教会の存在は象徴的に思われ印象に残った。右の山はダマシュトック、その前の青味をおびた氷塊はローヌ氷河の端のようである。

(大学総務部職員)